

閉会挨拶

放射線影響研究所理事長、HICARE 理事、IPPNW 日本支部理事 丹羽 太貫

丹羽太貫でございます。

本日のこの課題、「原爆被爆70年被爆者医療体験の継承と国際貢献」、これ非常に良いシンポジウムであったと思います。

そのような場で閉会のあいさつをさせていただけるというのは非常に名誉なこととも思っております。

それともう既に先生方が多くのことを語られました、この会合の閉会にあたって一つ申し上げたいがございます。それは、放射線の領域は一つの曲がり角に来ていると感じました。

何が曲がり角かということですが、まず、基本的にここのシンポジウムの設定は、HICAREとIPPNW、どちらも医療関係者の組織であります。

医療というのは、もともとサイエンスとそれを個人につなぐのであり、それを担当するのが医療関係者でございます。

特に権丈先生のお話などは、最高のサイエンスとテクノロジーの成果を患者さんの治療あるいは診断に充てている。これがないと実際、今の医療は成り立たないという状況をお見せいただきました。

もう一方で、そのようなサイエンスの基礎となる研究を行っている放影研の名前が何度か出てきてうれしかったのですが、放射線の健康影響に対する研究も日進月歩で今も進んでおります。その研究は例えば、クレメント先生のお話にありましたように放射線防護の方に使われています。この成果が放射線防護に使われる場合に、その対象となるのは主に集団でございます。人、個々じゃない。そしてこのような研究に必要なデータを集める時も対象になるのは個々の方々である以上に、集団としての人間が問題にされているわけです。

だからこれまでは、放射線科学の一部のこの放射線の健康の影響に関する研究というもの、その成果の応用というものは個というものを対象にしておりませんでした。

でも、今日、メラー先生がおっしゃったし、クレメント先生、HICAREのアクティビティを述べられた児玉先生、それから福島の話を作った神谷先生、これいずれもこの集団から得られた成果を最終的には「個」というものに役立てようというものであります。

特に禎子というキーワードで、佐々木禎子さんのお名前が出てきましたが、佐々木さんは、12年と言う生涯に留まらず、非常に長いタイムスパンをもって我々の社会の様々な側面に影響を及ぼし、かつ我々研究者の個々の活動にまで繋がっており、禎子という名前はこのような広がりを象徴しているものとして、出たわけです。

このようなことはこれまでありませんでした。実は、研究者や医療者関係者の中で、個人の名前が出されたり、個人の思いが語られることは実は私自身あまり経験しておりませんでした。

さてここで問題になっているのは、放射線の研究で集団を対象としていたのが、福島に見られるように個々の人間、すなわちそれぞれの被災者に返さざるを得ないという事実です。私自身、福島現場から広島に来て常々感じておりましたのは、被爆者の方に我々何をお返しできるのかと言う問題です。去年以来ずっと悩み続けていましたが、一つお返しできるとすれば、今日の皆様のお話に出てきたように、それぞれの被爆者の方に敬意をもって接することではないでしょうか。クレメント先生のお話には尊厳というキーワードも出てまいりましたが、被爆者の方々には、その方々が被ばくの結果生活がどのように変貌してしまったのか、そして大変苦しい中、多分頑張ってきたのではなど、思いを寄せる必要があると今日の話を聞いて思いました。

非常に画期的なシンポジウムでなかったかと思えます。以上でございます。